

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Jessadakorn Kalapong
論文題目	Emerging Middle-Class Aspirations through Labour Migration: An Ethnography of Thai Technical Intern Trainees in Japan (新興中間層の出稼ぎを通じた自己実現－日本のタイ人技能実習生の民族誌－)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、日本におけるタイ人技能実習生の民族誌的記述を通じ、出稼ぎ労働者の出身国における社会経済的背景と日本での滞在中に課せられる構造的制約のなかで、当事者たちがいかにして主体性を構築しているかを明らかにするものである。日本各地で様々な職業に就いているタイ人技能実習生への聞き取り調査と住居訪問やイベントへの参加などの参与観察を併用することで、彼ら出稼ぎ労働者たちの感情、思考、意味付けなどの主体性を抽出することが本論文では試みられている。</p> <p>第1章は序論である。技能実習生を含む労働力の国際移動は、これまでの先行研究ではプッシュ要因、プル要因などのマクロ経済的要因によって説明される傾向が強かった。こうした研究で描かれる労働者は、単に国際政治経済環境の従属変数たる受動的な存在でしかない。それに対し本論文では、参与観察を伴う民族誌的研究により、当事者自身の主観や主体性という視点から国際労働移動をとらえ直すことが提唱される。</p> <p>第2章では技能実習生の制度的背景が検討される。技能実習制度 (TITP) というのは、1993年に日本が正式に開始したもので、未熟練労働者の受入制限という建前を維持しながら、なおかつ未熟練労働力の不足を補う「裏口」として位置づけられてきた。ただしこれは、受け入れ国としての日本側の制度だけで完結するものではない。本論文では、送り出し国としてのタイ側での制度整備にも着目し、そこでは政府による人材選抜と、民間エージェントによるリクルート活動の2つのチャンネルが存在し、出稼ぎ予備軍がそれぞれの事情に応じてこのチャンネルを使い分けていることも明らかにされる。</p> <p>第3章は、タイ人出稼ぎ労働者たちの変遷を、母国での社会構造の変化という文脈に位置づけて考察する。1970-90年代までのタイ人海外出稼ぎは、主に農村の貧困を前提としたものであった。しかし1980年代からの経済成長の結果として、タイ農村部での生活の底上げが進展し、農民達もまた中間層化していった。ただしこうした新興中間層は、既存の中間層エリートからは依然として社会的・経済的に劣位に置かれている。日本での技能実習を含むタイ人の海外出稼ぎは、現在においてはさらなる社会的上昇によりこの劣位を改善する機会ととらえられている。</p> <p>ただしそこには矛盾も存在する。それは地位上昇のための海外出稼ぎが、少なくとも一時的には社会的な地位の下降を伴うという点である。この問題を検討するのが第4</p>			

章である。タイ人技能実習生には、本国で高等教育の学歴を有する者が少なからず含まれているが、彼らもまた技能実習の現場では、農園や工場での単純労働に従事させられ、また制度上の制約から雇用主を随意に変更することもできない。そうした環境を生きるために、人々は日本人雇用主への面従腹背的な態度、明示的な反抗などの抵抗を試みるが、その多くは忍耐によって不本意な現実をやりすごしている。

その一方で、人々は現在の不本意な環境を積極的に意味あるものへと作り替えようとも試みている。第5章では主に宗教の側面から、そうした試みを検討している。技能実習生の居住環境は概して劣悪であるが、そこに意味を付与するべく、人々は本国から持参した護符などを自作した祭壇に飾り、あるいは同僚のタイ人技能実習生たちとともに土地神祭祀を行うといったことを試みている。日本国内にタイ系仏教寺院は存在するがその数は少なく、全国に散在する技能実習生にとっては必ずしも身近な存在とはいえない。そのため、むしろ正統タイ仏教の周縁に位置するような微細な宗教的実践によって、技能実習生たちの生活空間は意味づけられている。

第6章では、技能実習期間終了後の将来設計について論じられる。技能実習生にとっては、実習期間の貯蓄を原資に自営業などでさらなる地位上昇をめざす、外国語の習得やあるいは海外での生活それ自体を目的に実習期間を延長する、あるいは第三国での出稼ぎをめざすなどの選択肢が存在する。そしてそれらは、実習生当事者自身が自分の将来に投影する願望によって規定されている。

第7章は結論である。経済成長により農民の中間層化が進む現在のタイにおいて、海外出稼ぎには従来とは異なる意味づけが与えられている。それはさらなる地位上昇を望む新興中間層たちの自己実現への衝動であり、本論文では、そうした人々の願望を内側から理解することにこそ、出稼ぎの民族誌的研究の新たな可能性があるという提言がなされている。